

府中市市民協働推進シンポジウム

ふちゅうの未来をデザインする～じぶん×地域のチカラ～

要旨

1 開催概要

□日時：平成27年11月20日（金）午後7時～午後9時

□場所：府中グリーンプラザ けやきホール

□主催：府中市、特定非営利活動法人府中市民活動支援センター

□プログラム：

(1)開会・主催者あいさつ 高野 律雄（府中市長）

(2)基調講演 山崎 亮 氏（株式会社 studio-L 代表）

(3)パネルディスカッション

コーディネーター

山崎 亮 氏

パネリスト

林田 健一 氏（リムザ自治会長）

奥村 幸子 氏（特定非営利活動法人アビリティクラブたすけあい 府中たすけあいワーカーズぽぽ事務局長）

鬼山 るい 氏（千賀まちづくり研究所所属、国立大学法人東京農工大学農学部在学）

依田 和也 氏（公益社団法人むさし府中青年会議所 まちづくり委員会副委員長）

(4)閉会・終わりのあいさつ

2 パネルディスカッション要旨

■自己紹介

（山崎）まずは、みなさんが何者なのか明かしていただくということで、林田さんから順に自己紹介をお願いします。

（林田）是政にある「リムザ」というマンションの自治会長をしております、林田健一と申します。リムザは平成17年3月にできた、553世帯の大規模マンションで、当初は自治会がなく、地域の人たちとの親睦を深めることができなかつたため、検討委員会を立ち上げ、1年間かけて自治会を設立しました。風通しが良く、安全で安心して暮らせるマンションにすべく、管理組合とタイアップして、防災訓練等の各種イベントを通じて住民同士の親睦を図りながら、地域の住民とも交流を深めるべく、多摩川清掃や

神社の清掃、くらやみ祭や文化センターまつり、是政八幡神社の例大祭、歳末防火防犯パトロール等を実施しております。

(山崎) ありがとうございます。それでは奥村さん、お願いします。

(奥村) 府中たすけあいワーカーズぽぽ事務局長の奥村幸子です。府中たすけあいワーカーズぽぽは、ワーカーズコレクティブという協同組合型の運営形態で、メンバー全員が運営に携わるといふ形の働き方をしています。働き方においても、お互いに尊重しあいながら、それぞれのライフステージに合わせた働き方をみんなで作っています。私たちは設立してから20年が経ちますが、地域の中でお互いに助け合う、支え合う地域づくりのために、赤ちゃんから高齢の方まで、子育てや介護、家事支援といったケアを提供してきました。また、2013年より、『多世代交流の場 ぽぽの木』という居場所事業を立ち上げ、新しいコミュニティとして地域のつながりを作り、自分らしく生きがいの持てるまちづくり活動をすすめています。

(山崎) ありがとうございます。それでは鬼山さん、お願いします。

(鬼山) 千賀まちづくり研究所所属、東京農工大学農学部4年の鬼山ると申します。千賀まちづくり研究所では、学生が中心となって、「府中 de しゃべとも」というイベントを開催しています。私たちの中には農村での地域づくりを学んでいる学生が多いのですが、府中で学んでいるという関わりがあるにも関わらず、「府中のことを知らず、関わったこともないというのはどうなのか。もう少し府中で活動してみたい。」と思い、府中NPO・ボランティア活動センターの方々と一緒に、ワールドカフェという手法を用いて、若者に関心を持ってもらう入口づくりを進めるための活動を行っています。

(山崎) 鬼山さんは今、大学4年生ですか？進学と就職はどっち？

(鬼山) 進学です。

(山崎) この進学は府中にとっては財産ですね。あと2年間はまちづくりに関わるといふことですね、ありがとうございます。それでは依田さん、お願いします。

(依田) こんばんは、むさし府中青年会議所に所属しております、依田和也と申します。むさし府中青年会議所は20～40歳の青年が「個人の修練」、「社会への奉仕」、「世界との友情」などを目的に集まっている団体です。よくJCと省略して呼ばれることがあります。その中で、今年度私が所属している「まちづくり委員会」では特に、「府中のまちづくり」について考え、活動を行っています。具体的には、毎月20日頃に府中駅周辺でごみのポイ捨て&喫煙禁止を呼びかける「マナーアップ」と、先月行われま

した「JAZZ in F u c h u」を行っています。青年会議所のメンバーはそれぞれが企業の代表者であったり、勤め人であったり、様々な人が集まっています。その中で、私も本屋という自営業をやりながら、JCに参加しています。

(山崎) ありがとうございます。JC っぽい挨拶でしたね。JC の活動は今日もされていたんですか？

(依田) 毎月20日に府中駅周辺で、ポイ捨てや路上喫煙禁止をPRするマナーアップという活動をしており、今日も夕方6時から7時でやってきました。

(山崎) 毎月20日に必ずやっているんですか？

(依田) 市役所と一緒にやってるので、20日が土日になる場合は前倒しで実施しています。HP や facebook にも掲載しています。早速PRさせていただきますが、来月は18日にあります。

■これまでの協働事業で印象的だった出来事や、工夫したこと

(山崎) そういう活動は、ぜひ参加してほしいと思います。ただ、楽しさが分からないと、参加したいという気持ちにならないと思うんですが、そういう活動をしているときの楽しさや醍醐味はありますか？

(依田) マナーアップでは、マイクを使って声をかけながら活動をしているのですが、やっているときに「綺麗になっていいね。」と声をかけられます。

(山崎) 実際に声をかける人がいるんですか？それはうれしいですね。

(依田) 今度は一緒にやりましょうよ、という言葉が、のどまで出かかります。

(山崎) 言ったらいいじゃないですか！握手でもハグでもして言うべきですよ。今の「楽しさ」系の話を聞いてみたいのですが、自分たちの活動はここが楽しい、ここにやりがいがある、又はそのために工夫をしている話など、ありますでしょうか。

(鬼山) 私たちはこれまで、大学で勉強はしてきましたが、現場で活動する機会がなかったので、府中のことを全然知らない状態から始まりました。したがって、府中について知ることができるのが楽しいです。活動をするたびに、今まで全然知らなかったことが分かって、全然知らないおもしろい人たちと出会って、府中市外の市区ともつながりが生まれるというのが、本当にすごく楽しいですね。また、イベントの企画・運営という面で、勉強も兼ねてチラシ作りや企画書の作り方というのを教えていただくおもしろさもあります。

(山崎) もう少し具体的に、活動の中身を教えていただけますか？

(鬼山) これまでに4回、府中 de しゃべともを開催しているのですが、1～3

回はワールドカフェという手法を用いて、みんなが話しやすいテーマを1つ決めて、約6人のグループで話をしています。第1回目は「知らない人とじもとーく」というテーマで、あなたにとっての地元ってどこですか？という、みんなで話せるテーマで、違いを楽しみながら色々な人と話せることが、私たちの活動の特徴ではないかと思います。

(山崎) 参加者数や年齢層はどのような感じなのですか？

(鬼山) 若者を中心に呼んでおり、当初は20～30代の方が多かったのですが、最近では、まちの中でチラシを手にとり参加してくれたおばあちゃんや、子供連れのお母さんも参加してくれるようになり、年代は多様になってきています。

(山崎) ワールドカフェとはどのようなものなのか、より詳しく皆さんに説明いただくことは可能ですか？

(鬼山) 私たちは30人くらいの参加者を集めて行っているのですが、その中で6人ずつくらいのグループに分かれて、共通のテーマについてそれぞれのテーブルで話をしてもらいます。話した内容は、テーブルの上に模造紙が置いてあるので、そこに書いていけるようになっていきます。模造紙に書くことで、自分の意見を相手が聞いてくれたという、受け入れられた感覚を得ることができたり、模造紙の中で話が進んでいくことで新しい視点が見えてきたり、話をするだけでは生まれにくい世界観の広がりなどがあります。

ワールドカフェは数十分でチームを変えて、それを3回位繰り返すことで、たくさんの人たちと話をすることができるようになっていきます。ただし、テーブルの上の模造紙は固定されており、前の人たちがどのような話をしていたのかを見ることは出来るので、たくさんの人たちと話せる機会があるというのがワールドカフェです。

(山崎) 全30人が6人ずつということは、全部で5つのグループがあるということですね。その5つのグループをカフェに見立てて、そこにお客さんがやってきます。カフェにやってきたら、口が達者な人は話せばいいし、話すのが苦手な人は書いてもいい。そうすることで、認められた、受け止めてもらえたという感覚があって、それを20分くらい行ったあと、次のカフェに移動します。すると、そのカフェにはすでに前の人々が模造紙に書いた意見やアイデアがありますから、前の人々はどんな話をしたんだろうと見ながら、自分たちの思いを重ねていきます。

このように、話し合いの方法を変えてみると、出てくる意見が変わっていくことがあります。市民協働の際は必ず会議をすると思うのですが、会議のやり方を変えると出てくる意見も変わるという可能性は、大いにあります。しかし、農村地域など、参加者の年齢が75歳以上の方々

の中で「ワールドカフェをやりましょう！」と言っても、よく分からんって言われます。20分後に次のテーブルへ移動してくださいって言うても、私はいいですと言って動かないということがあるんです。この人たちに意見を出してもらうには、どのような雰囲気だと良いのかということを考えながら、会議のやり方を開発していくと、アイデアが生まれる可能性があると思います。JCではワールドカフェはやってますか？

(依田) やっていません。おもしろそうだと思います。

(山崎) ぜひやってみてください。それでは奥村さん、楽しいことや感動したこと、工夫したことなどを教えてください。

(奥村) 今回は「協働」ということで、私たちが普段どのようなことを協働で行っているのかを改めて考えたら、色々な形で進めていることに気がきました。実は、私たちもワールドカフェを行っています。現在、まちづくりを目的とした独自の協議会の中で、「まちづくりカフェ」を行っているのですが、その中で、府中で暮らしている市民の人たちには何が必要なのかということワールドカフェ方式で話し合い、働き方や子育て、介護など、ざくばらんに意見を集めています。そこから、出てきたテーマが絞られてきて、みんなが集まれる「居場所というものをつくるために活動を始めています。また、府中市からの委託事業で、「産前産後家庭サポート事業」を行っており、産前産後のお母さんのところへ私たちが行って、子育てや家事支援を行っています。この事業を始めて約10年が経ちますが、先日やっと、サービスを受けた方が、お子さんが5歳になったからということで、ぽぽのメンバーになってくれました。10年に1人というのは少ないと思いますが、こういった事業をアピールして広げていきたいと思っています。

(山崎) これから増えていくでしょうね。お世話になった人たちが、今度は私が役に立てるんだったらと、やる側になるということは十分に考えられます。先ほど仰っていた、ワールドカフェをやられている場というのは、誰でも参加できますか？

(奥村) 広報活動はしているので、一応お声かけはしているのですが、なかなか人を集めるのが難しく、facebookなども検討する必要があると思っています。

(山崎) もしこの会場で、ワールドカフェに興味を持たれた方がいらっしゃったら、鬼山さんや奥村さんの活動を調べて体験させていただくといいかもしれませんね。ただ、体験する際にはそこに何かを残していくようなギブ&テイクの関係が必要であると思いますから、自分はそこに何か残してこれるかということを考えて、双方が長続きするような関係で参加・参画、

もしくは協働されるのがいいのではないかと思います。

ありがとうございました。それでは林田さん、いきますか。

(林田) 我々はワールドカフェのようなことはしておりません。リムザ自治会は40代前後の若い世帯が多いため、地元の年配の方や子供達がたくさん参加される是政文化センター圏域コミュニティ協議会主催の是文まつりや、是文運動会で設営や用具係等の力仕事を中心にサポートしながら、イベントを盛り上げて多種多様な方々と親睦を図っております。最近では、地域イベントにて司会をはじめ中核スタッフとして重責を任されるまでになりました。

なお、私たちリムザ自治会はオリジナルカラーをオレンジとし、自治会ベストやジャンパー、タオルを身に着けることにより、大人も子供もお互いにすぐ認識し合える一体感と協和をモットーに、多種多様な立場の人たちとリムザのマンパワーを生かしながら活動しております。

その中でうれしかったことや、楽しかったことは、先ほど活動人口という言葉がありました。リムザでも「会員になるのはいいが、お手伝いはちょっと…」という方がいらっしゃいます。しかし、リムザの住民のための意見箱を置いたところ、その中に「年末パトロールをやりましょう」という意見があり、役員会で協議の上、実施が決定しました。結果として、30人くらいの親子が参加されました。リムザの面積は東京ドーム1.8個分とかなり広く、24時間有人管理なのですが、地域のコミュニティという観点から、子ども達にも楽しんで参加してもらうことができ、うれしかったです。

工夫した点としては、各種イベントの参加賞として配った有料のごみ袋を通して、水切りや分別のお願いするなど、イベントを通じたごみ減量PRをするなど工夫をすることで、ただのイベントで終わらないようにしています。その他、イベントの中で防災のテントを作るなど、防災訓練にもなるような活動にできるよう、工夫をしています。

(山崎) ぜひ自治会で、ワールドカフェをやってみてください。おもしろいと思います。出てくる意見の質が変わる可能性がありますので、今までとは異なる雰囲気でも会議をやってみるのも1つの方法ではないかと思います。

■ふちゅうの未来をデザインする

(山崎) さて、次はやはり、府中のこれからについて語ってもらいたいと思うのですが、陳情・要望ではなくて、これからこれやりたい！という提案・実行型の意見にしてもらいたいと思います。それでは林田さんから、お願いします。

(林田) 今回のテーマは非常に大きく、難しいものだと思います。私は自治会を通じた様々な方とのコミュニケーションが大事だと思います。そのためには、皆さんが参加しやすくする必要があり、そしてそのためには楽しくなければならぬと思います。今は地元のお祭や行事に参加しながら、まずは横のつながりを作っていますが、ゆくゆくは自治会連合会等を通じてみなさんと情報共有をしながら、より住みやすいまちにしていきたいと思っています。30年以内に70%の確率で大地震が起こるとされていますので、そこも大きな問題だと考えています。

(山崎) 30年以内に70%の確率で大地震が起こるんですか？

(林田) はい。したがって、日頃からの自助・共助とコミュニケーションが非常に大事であると思います。市でも、自主防災連絡協議会を立ち上げていただいているので、そこを核にしながら住民の意識を高めて、活動してければと思っています。

(山崎) ありがとうございます。それでは鬼山さん、お願いします。

(鬼山) 私は新潟出身で、田舎で育ってきたのですが、府中という都市で生活を始めると、1人暮らしということもあり、地域とのつながりが全然ないなと感じました。ある意味、個々の自由があり、人との付き合いがあると不自由に感じてしまうとも言えますが、その不自由さの中に生活の安心や、人とつながることによって自分の幅を広げるきっかけがたくさんあると考えています。そのため、不自由さをどう魅力に感じてもらうようにするか、面白くするかを考えていきたいと考えています。

人との関わりがあまりなかった人がまちに関わり、自分の生活を豊かにするにはハードルがあると思うので、個々の興味・関心に合う比較的開かれた場が必要であると考えています。そのために、私たちはワールドカフェやまち歩きの実践を実施していますが、全てに参加する必要はないと思っています。府中では様々な活動をされている方がいるため、その中で自分に合うものに参加していくことで、人との関わりが徐々に生まれ、自分もやってみようと思えるような流れができれば良いのではないかと考えています。

(山崎) ありがとうございます。それでは依田さん、いかがでしょうか。

(依田) 来年もまちづくり委員会に参加させていただくのですが、その中で「まちづくり」とは何かを考えたときに、結論はでなかったのですが、ある意見として、JCでどこかに行くことになると家族との時間をとられてしまうという意見がありました。JCは、昔のイメージを持ってる方からすると、やんちゃな団体というイメージがあるそうなのですが、皆さん良い活動をしています。まずは、身近な人からJCの活動を理解してもら

い、一緒に活動することが本当はスタートで、そこから家族にも理解してもらい、笑顔が生まれれば、隣近所にも広がり、府中市全体に広がっていくのではないかという話をしてみました。おいしいラーメン屋が見つかった時に友達に勧めるように、「府中っていいよ！」と友達や知り合いに勧められるまちにできればいいと思っています。

私は本屋をしながら読み聞かせ活動を行っているのですが、様々なイベントに参加するときに、本屋の企業名を答えると儲けるために来たのだと思われてしまいます。しかし、市民団体の名前を出すと抵抗なく受け入れてもらうことができます。企業なので、儲けることも少しは考えますが、それだけではないと分かっている方がJCにも集まっていて、まちを良くしていこうという人もいるのだということを実感しています。

また、様々な話を聞いている中で、皆さんの中で温めているアイディアがたくさんあるということに気付きました。しかし、発言する場所がなかったり、言っても受け入れてもらえないだろうと思ってしまって言わないということもあると思うので、実現できる場所があることが必要だと思っています。

うちは本屋なのですが、本を売って儲けることだけではなく、本を買った人が笑顔で幸せになってくれたらいいなと思いながら仕事をしているので、本を題材にして一緒に何かやりませんかというアイディアがあったら、ぜひ一緒にやりましょう。

(山崎) ありがとうございます。JCってどうしても、入ってない人は近寄ってはいけない気がしてしまうのですが、JCの人が「みんなで話をする場です。」ということを出して対話する機会を作ってくれば、アイディアを持ち込んでくれる人がいる可能性がありますね。また、本屋の話も、本を通じてみんなが幸せになってくれるにはどうしたらいいのか、アイディアがあればぜひということなので、どちらも通じているところがあると思います。本屋だから、JCだからと色をつけずに、一緒に何かをやっていけるきっかけになればいいんだろうなと思います。

それでは奥村さん、お願いします。

(奥村) 20年間の活動の中で、ぽぽのメンバーが今感じていることは、子ども若者も子育て世代も高齢の方も、互いに尊重しあい、自分らしく地域で暮らすことができるまちづくりを実現したいということです。市民の中にも様々な方がいらっしゃいますが、それぞれの市民が主体性を持ち、何かをしてあげるのでも、何かをしてもらうのでもない、一緒に何かをする、相利性のある活動をする意識が大切だと思います。そのためには、主体間の垣根を取っ払ったようなつながりが非常に重要です。

先ほどまちづくりカフェのお話をさせていただきましたが、親子広場や子ども食堂、1人暮らしの高齢者の集まる場所など、様々な「居場所」があると思いますが、地域によってその居場所は異なり、様々な課題解決が図れるので、居場所作りは非常に重要であると、カフェを通じて感じました。現在、居場所作りのための活動を進めていますが、そこでの課題が「場所」の問題です。いざ始めようと思っても、イベントとしてはできるかもしれませんが、市民レベルではなかなか場所を構えることが難しいので、常設でいつでも来ることができるよう、市や企業と協働することで、進んでいけばよいと感じています。

(山崎) 事業を起こすときは、「人」、「物」、「金」、「情報」などの資源が必要だとされていて、物の中には実は「場」も入っています。ところが企業体のように効率的にお金を生み出したり、借りるようなことはできないので、もしそれが公益的な活動であるならば、自分たちはここまでやるから、市はここをサポートしてくれと言うことで役所と協働していくという、本日のテーマが重要になってくるのだと思います。そうでなければ、市民だけでやっていて、徐々に疲弊していくようであれば、かなりもったいないことになってしまいます。市民が公益的なことをやろうと思っているのに、協働がうまくいかなかったがために、活動が1つずつ消えてしまったときに、次に問われるのは市役所側だと思います。どのように協働するのか、協働するときの自分たちのサイドはどうか、どのように市民と役割分担をして、それを議会に説明できるようにするのか。これからの協働のまちづくりで、新たに行政の内部で始めなければいけないことだと思います。

また、先ほど鬼山さんが哲学的なことを仰っていたのですが、安全と自由について、みんなと一緒にいると安心で安全なのですが、同時に不自由なところが出てくるので、これをどう乗り越えるかということについて、バウマンという哲学者が同じことを言っています。バウマンは答えを言っていないですが、僕は安全と自由を一步乗り越えたときに重要な要素が、「楽しさ」なのではないかと思っています。安全だけど不自由だなと感じても、それを楽しさで乗り越えていくこともあるでしょうし、自由だけど不安だとしても、それも楽しさで乗り越えていくこともあるでしょう。楽しさの種がないと、どうしても消極的になってしまいますから、誰と楽しいことができるのかということが、大事ではないかと思っています。

最近我々がよく言っているのですが、「楽しさの自給力」を自分たちの中で作ることが出来ないか、いつも考えています。楽しいということを自分で生み出す力を市民はどうしたら手に入れることができるだろうか。

お金を払って誰かに楽しませてもらうのでは、すぐにその楽しさは消費されてしまいますから、自分で楽しさを作ることができるようになると、その人の人生はずっと楽しいと思います。つまらなくなったら、また新しい楽しさを自分で作ればいいので、お金はかかりません。もしかしたら、林田さんの仰っていた自治会の中の防犯・防災を楽しいものに変えていくような、普通はつまらないことを楽しいものに変えていく力があれば、きっと次から次へと楽しいことを生み出すことができるでしょう。そして、奥村さんの仰っていたように、課題解決を楽しくできるのではないのでしょうか。学生団体はもちろん、JC も、楽しさは重要であると思います。

残念ですが、人々は正しいだけでは動かないし、集まらないのかもしれない。正しいことと楽しいことがミックスされるから、人の気持ちが動くのだと思います。そういった意味で、府中市民の中で楽しさを自給する力をどう高めるのが重要であると思います。楽しいということと正しいということをつなげて府中の中で活動すれば、楽しさの自給率が上がり、活動人口比率も高まるのではないのでしょうか。

今回ディスカッションをする中で、みなさんに共通していると感じたことは、「楽しいということ、いかに工夫して自分たちの活動の中に入れていくのか」ということです。これは単なる表面上の話ではなく、活動の本質につながっていると思います。楽しさを事業の中にペたっとくっつけるだけではなく、事業の中に練り込んでいくにはアイデアが問われますので、これを上手くできる活動団体は、次々と楽しくて、ためになる活動を生み出していくことができるのではないのでしょうか。

役所の人たちにとっては、団体の持つ楽しいという部分を残して、どのようにサポートしていくのか、それができる職員になるためにはどのような取り組み方をすればいいのか、ここのアイデアが益々問われる時代になってきたのではないかと思います。

以 上